

地方だより

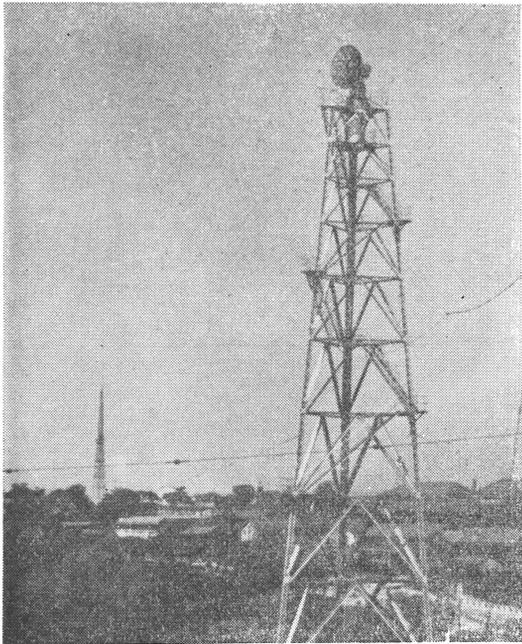
—東京管区気象台技術課—

今回は編集子の指示により、東京から「地方だより」を書くことになった。

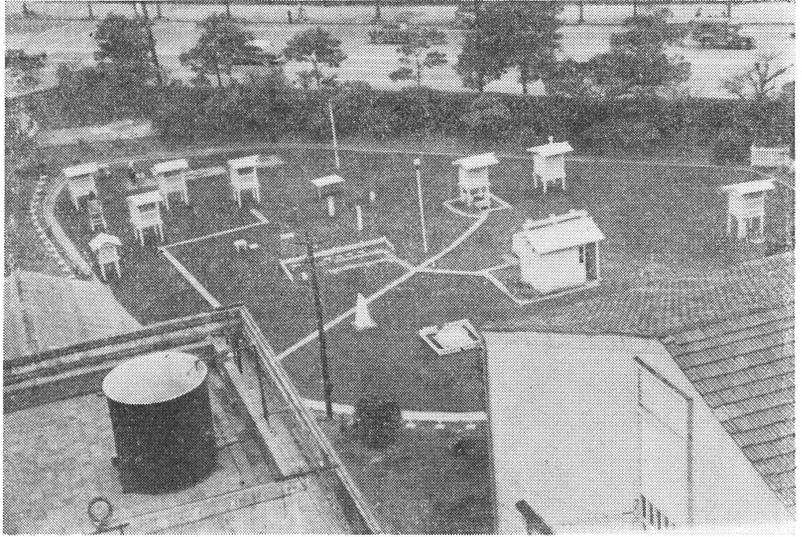
立冬も間近い、今日このごろの東京の露場に付てば、柔かい日ざしが枯れそめてゆく芝一面に射しわたっている。

ある研究官が、いつか露場の芝を踏みながらぼつんと洩らした言葉を思い出している。「久しぶりに露場を見ると露場はいいものだ、何かほのぼのと心のなごめるものがある」これは久しく露場を離れている気象人の述懐だと思う。

さて、東管技術課という課名は全管区唯一のものである為、部内からの文書その他に、東管観測課と書いてくるものが、今だに跡を断たない。これも無理ない事と思う。誰かが、観測課というよりも技術課の方がより高度な仕事をしている感じがしませんかと云ったので、なるほどと、大笑いした事もある。技術課は観測と通信の両係で発足したが、その後、レーダーが加わり、観測が第1、第2に分れるなどで、現在は4係による機構である。



東京の気象レーダー(レーダー・アンテナの高さ52.5m)



時計塔から見下した東京の露場

観測業務は24時間フルの観測と通報の基本業務に大気放射能観測等が加わってきている。測器も大して変わったものがあるわけではないが、研究所に試作されたものが、いろいろと入ってくるので有難い。佐貫博士考案の隔測施設(気象台第2号)は、もう数年使い、特に風と雨の部分を重宝している。又、故上利氏の考案による上利式感雨器があり、観測者を助けている。資料は明治9年からの気象庁の歴史とも云うべき長大なものを整然と保存している。これを見上げる度に思う事は、観測精神と云うと古いと云われるが、全く先輩から今日につらなる尊い測候精神によるものと感が深い。

ここでは、民生協力から進んでP・R活動も担当している。観測係で処理している気象資料の文書照会と資料閲覧の件数は全国第1位を示している(昭和31年度本庁総務課の資料による)。人口800万都民の要請によるものである。これらの要請に応え、この春、「東京都の気候」を刊行した。これに対し、高橋(浩)博士の懇切な書評をいただき、又、学校図書館向優良圖書の選定にも合格した。天気相談所では毎日の問合せにこの本を開かない日は殆んどないようで、有難がられている。

東京のレーダーについては、いろいろなものに紹介されているので、紙面の関係もあり、ここでは一切割愛するが、Meso Meteorologyの解析と降雨機構の究明には全く新しい近代気象武器と云わざるを得ない。日々のレーダー観測からは、次ぎ次ぎと新しい研究テーマが見つけられている。やがて蓄積された資料から打出されて来るもの期待は大きい。今夏の梅雨末期の局地豪雨にさいしては、いち早く取り上げたレーダー通報は各所から好評を受け幸先よい滑り出しをした。最後に、通信は大管区の通信施設を一手に受けもち、一方、無線ロボット関係も加わり嬉しい悲鳴を上げている。

東京から地方だよりを書くこんな仕末、御寛容下さい。(三谷一郎記)